

神国大博覧会開催計画とその行方

－昭和初期石倉市政の松江観光都市化戦略－

能川泰治（金沢大学人間社会研究域）

はじめに

◆課題 「神国博の構想を読む」

◆注意点 特に当時の松江市（市長：石倉俊寛）の経済振興政策との関連

- ・松江市が主催者であることは十分ふまえられてきたか？
- ・石倉市長は松江市をどのように発展させようと考えていたのか？
- ・松江市の史料（公報、事務報告書等）は十分活用されてきたか？

I、神国博開催計画の内容

◆会期 1938（昭和13）年4月5日～同年5月29日（55日間）

◆会場 第一会場＝松江城山公園、第二会場＝白湯埋立地

◆名目 市制50周年と陰陽鉄道開通記念

◆主な展示館と催し

【鳥瞰図】

- ・多数の展示館に加えて、遊覧飛行場・遊船場・サーカス
- ・出雲大社、熊野大社、美保神社、一畑寺、鰐淵寺等の神社仏閣では会期中に臨時大祭などの特別行事を開催して協賛

◆目的 「本博覧会は現下国事多難に際し建国以来伝統の日本精神を発揚すべく「神国日本」を表徴して内外の物産、国防、教育、文化資料等普く古代、近代に渉る事物の種々相を一堂に展示して国運の隆昌、産業の振興、文化の発達に資し併せて日本文化の発祥地神国出雲の産業並に観光的要素を広く宣伝せんとするものである」

（「神国大博覧会鳥瞰図」裏面の「神国大博覧会の内容」より）

☞ 国防思想の普及（軍の要請）、植民地と満洲国への関心の喚起、さらに娯楽の要素をもたせることに配慮しつつも、県内外の物産の紹介を通じた産業振興と観光資源の宣伝、あわせて松江及び出雲の神社仏閣などへの観光客誘致が博覧会のねらい。

II、石倉市政

◆市長 石倉俊寛（1880～1975）

- ・1929（昭和4）年から1945（昭和20）年まで4期16年在任。 【史料1】
- ・不況の時代の財政再建と近代都市としての松江の基礎づくり（松江市公会堂、松江大橋等々）が注目されるが、湖岸道路建設反対運動に対する働きかけの際に、松江を遊覧都市・水郷都市として発展させる必要性を強調。 【史料2】

☞ 松江を遊覧都市・水郷都市として繁栄させるべきという主張は単なる方便ではない。

◆石倉市政下の観光事業＝産業振興政策

- ・観光客誘致と地元商工業・サービス産業活性化とをリンクさせる試み
- ・他都市（植民地も含む）で開催される博覧会に出品し、観光資源を宣伝 【史料3】
- ・石倉市政下の松江市は県・市の観光協会に多額の助成金を交付
松江市観光協会による観光客誘致のための宣伝＝『水郷松江と神国出雲』の刊行

a 紹介される主な名所

市内 宍道湖の眺望・景観、城山公園（松江城天守閣）

郊外 記紀神話に登場する神を祭神とする神社

b 遊覧コースの提案

【史料4】

いずれも松江を起点とし、省線・一畑電鉄・市バス、汽船で出雲大社とその周辺あるいは美保関とその周辺を参拝・遊覧したのち、再び松江に帰るコース

※ 協会が提案する観光コースの起点・中継点としての松江

c 「松江名物」の宣伝

漆器・陶器・菓子・酒・郷土芸術品などを名産品として宣伝、あわせて松江駅前に名産品販売所と松江観光協会案内所も設置

☞ ①地域の歴史遺産（出雲大社をはじめとする神社仏閣、松江城と城下町）及び自然地理的景観（宍道湖、美保関、大山）を観光資源として活用＝宣伝活動を通じて観光客を誘致、「名産品」を生産する地場産業と旅館・交通業をはじめとするサービス産業が潤う仕組み。

②遊覧コースの起点・中継点であり、観光客をターゲットとする名産品デパート兼インフォメーションセンターとしての松江市（まさに松江観光都市化戦略）及び広域遊覧圏＝観光開発圏としての「出雲」（松江市でも島根県でもないエリア）が浮上。

おわりに

◆以上のような松江観光都市化＝広域遊覧圏振興戦略の最後の仕上げとして発案されたのが神国大博覧会だったのではないかな？

◆松江市が神国博開催を計画する契機 －なぜ1930年代半ばなのか？－

【史料5】

- ・さらなる交通網（遠距離交通）の発展
伯備線全通（1928）に続いて、1936～37年に三神線・木次線＝陰陽連絡線が全通
→京阪神・九州に加えて山陽方面からの集客が期待できる＝国内有数の観光都市として松江の知名度をあげる、即ち観光事業の重要性を市民に周知（「覚醒」）させるチャンス
- ・満洲国建国（1932年）
→「裏日本」から脱却し、満洲に向けた日本の「表玄関」として注目を集めるチャンス

◆神国博と石倉市政の松江観光都市化戦略との関連に注目することで見えてきたこと

- ・兼ねてから博覧会の経済効果に注目し、観光事業にも力を入れていた石倉市政
- ・大日本帝国の観光都市としての松江

☞ 日中戦争で神国博開催計画は立ち消えになってしまったが、「まぼろし」に終わったことだけに目を奪われていてよいのだろうか？後に開催される支那事变博覧会（軍隊の関与）との関連は？松江の観光都市化戦略、広域観光開発圏の行方は？戦後の博覧会開催や観光開発との関連は？

【史料1】

いしくらしゅんかん 石倉俊寛 1880年2月11日～1975年3月20日（明治13～昭和50）元松江市長。1929年（昭和4）から1945年（昭和20）まで4期16年間在任。その間、新大橋・現松江大橋架設、国道9号線・新大橋通り建設を中心とした道路網の整備、市公会堂・陸上競技場・野球場・ヘルン記念館等の建設、市営自動車・ガスなど多くの事業を手がけ、また松江放送局や測候所の誘致など松江の都市近代化の基礎をつくった。松江市名誉市民、元海軍主計少将。……（後略）……
（島根県大百科事典編集委員会『島根県大百科事典 上巻』（山陰中央新報社、1982年）79頁）

【史料2】

①今や伯備線は開通し近き将来には大社宮島線の開通を見んとし、又松江港、恵曇港修築竣成の期も近づき、殊に松江と神都大社とを結ぶ一畑電鉄は日に十数回の直通電車を通はして居る様な次第で、時世は將に刻々と変化しつゝあるのでありまして、水郷都市遊覧都市としての特色を発揮すべき施設につき時代は將に之を促して居るのであります。各般の施設に於て遅れ勝ちな我が市に於ても、遊覧都市としての対策に付計画を樹つるは最も肝要であります。
②湖岸道路計画の概要は以上の如くでありまして、其の計画は遊覧水郷都市の本能を発揮するに最も必要とする宍道湖観賞道路を築造するものでありまして、計画に示した通此の道路は湖北線、白潟線、湖南線の三線より構成され、言はゞ湖岸明媚の風光を東南北の三面より擅に觀賞し得らるゝ計画を採用したのであります。之に依つて初めて水郷美観賞の目的を達せられるのであります。
（①②とも石倉俊寛「湖岸道路問題に就て」『松江市公報』号外、1930年2月26日）

【史料3】

①博覧会出品奨励
本市ノ参加セル各都市ニ於ケル博覧会出品状況左記ノ通りニシテ、本市名産品、土産品ノ宣伝紹介ニ多大ノ効果ヲ収メタリ。殊ニ観光事業ノ一端トシテ金沢市ニ於テ開催セラレタル「観光土産品ノ大博覧会」ニ本市ヨリ出品セル「ジオラマ」ハ、非常ナル興味ヲ喚起シ好評ヲ博シ金牌ヲ授与セラレタリ。
（松江市『昭和七年松江市事務報告』（1933年））
②博覧会出品奨励
就中横浜市ニ於テ開催セラレタル「復興記念横浜大博覧会」ニ出品セル観光資料「出雲の神詣で」ハ頗ル好評ヲ博シタリ。マタ台湾台北市ニ於テ開催セラレタル「始政四十年記念台湾大博覧会」ニ出品予定タリシ島根県ガ参加中止トナリタルモ、本市ニ於イテハ断然之ニ参加シ該博並ニ総督府関係者ニ非常ナル好感ヲ以テ迎ヘラレタルハ大ナル収穫トスルニ足ル。
（松江市『昭和十年松江市事務報告』（1936年））

【史料4】

団体客の「観光コース」に就いて
◆出雲観光のコースの組方は種々ありますが著名な神社仏閣に詣で出雲の風光を探勝するには左記のコースで水郷松江に一泊されるのが便宜でせう。
京阪地方及伯備線方面より出雲遊覧コース
出雲大社朝参一日御碕神社——畑薬師——松江一泊市内名所及近郊名所八重垣神社——枕木山——美保神社——境港——米子經由帰路
……（以下略）……

松江名物

……（中略）……

- ◆尚観光客の便宜の為に、市内一流の商店の名産品を網羅した松江名産品販売所が松江駅前にある。
（松江観光協会『水郷松江と神国出雲』（1932年）／松江市史編集委員会『松江市史 史料編 11 絵図・地図』（2014年）に所収のものを参照）
- ※ 松江観光協会は、1931（昭和6）年に松江市が中心となって、商工会議所、旅館組合、置屋組合、料理屋組合で組織され、松江市の産業課内に設置された。

【史料5】

①昭和十一年度島根県松江市歳入歳出予算説明

博覧会調査費

……（前略）……今や交通機関も全く完備し殊に中国に於て陰陽を連絡する有数の鉄道線路たる木次落合線及三神線は着年ならずして開通するのでありまして、其の開通の暁には広島、福山方面より我松江市への交通極めて頻繁を致すべく、彼は産業経済文化促進に影響する所多大なるものあるべく、又満洲国の建国に依り当市は北鮮を通して同国への最捷径たる関係上、海陸交通の要衝を占めたる本市は重要なる地位を占めて居るのであります。時恰も昭和十三年は本市の市制施行五十年に相当致しますのと、如上中国に於ける陰陽連絡線の開通と相俟つて、此の機会に神国出雲産業と観光大博覧会を開催し、普く内外の各地より優秀物産観光施設を蒐集陳列し、採長補短彼此考覈以て産業及観光の進展に資すると共に、外来多数の顧客を吸収して地方民心を作興し、併せて神国出雲水郷松江の実情と地方的物産を紹介するは極めて緊要と認めまして、之れが開催の準備調査経費として博覧会専門家を囑託員として招聘費金四百五十円、係員の調査出張旅費金二百円、消耗品備品費金六十円、関係者会合費金二百四十円、雑費金五十円、合計金一千円を計上した次第であります。

（『松江市公報』173号、1936（昭和11）年2月26日）

②松江市産業振興策要覧（抄）

博覧会

近時道路橋梁ノ改築、飛行場及国立米穀倉庫ノ設置、築港及湖川整備、陰陽線ノ貫通並各般ノ施設等市制施行五十周年ヲ目指シテ漸ク面目一新ノ機会ニ入ラントス、此秋ニ当リテ多年待望ノ博覧会ヲ開設、地方ノ宣伝ハ勿論産業ノ開発、諸施設ノ促進及ビ当業者ノ覚醒等ノ懸案ヲ一氣ニ解決セザル可カラズ。
（『松江市公報』181号、1936年8月13日）

（注）【史料2】～【史料5】には、能川の判断で句読点を付した。また、下線は全て能川による。

【主要参考文献】

- 内藤正中『県民100年史32 島根県の百年』（山川出版、1982年）
- 吉見俊哉『博覧会の政治学』（中公新書、1992年）
- 古川隆久『皇紀・万博・オリンピック』（中公新書、1998年）
- 有馬誉夫『島根の観光レジャー史（明治・昭和戦後）』（2011年）
- 有馬誉夫「幻の「松江神国博」の顛末」（『山陰中央新聞』2014年6月3日付）
- 山根正明「〔松江市史コラム第32回〕再考・まぼろしの松江城博覧会」（松江市ホームページ）
- 工藤康子「近代松江における観光の展開」（『日本国際観光学会論文集』21号、2014年）